

ナイジェリアの英語教育

香川大学 竹 中 龍 範

I. 概 観

1. 言語的背景

ナイジェリアは1960年10月にイギリスより独立し、1967～1970年のピアフラ内戦を経て、現在19の州から成る西アフリカの国である。首都はラゴスにおかれているが、アブジャ付近に移す計画があるという。その言語は部族語として約250が数えられており、中でも北部のハウサ（総数約1,000万）、フラニ（約500万）、カスリ（約220万）、東部のイボ（約900万）、西部のヨルバ（約1,000万）、中西部のベニなどが主要部族を構成している。そしてハウサ語、イボ語、ヨルバ語、フラニ語を合わせると全住民の約60%を占める。公用語は英語となっているが、商業用語としてはハウサ語が最も広く通用している（⑧：9-11）。また、ナイジェリア英語は、ある種の語について独特のストレス・パタンをもつ、stress-timedよりは syllable-timed である、表現の適切性について標準的な英語と異なるところがある、などの特徴を有し（③：42-44）、現在、言語学的視点からその分析が進められている。

2. 教育的背景

ナイジェリアの教育は州政府の管轄下にあり、全国的な教育制度はない。ただ、基本的には各州ともほぼ同じで、6歳以上の児童に対し、通常6年の初等教育が施され、その後4年以上の中等教育が行われる。初等教育は、西部州では1955年に、ラゴスと東部州では57年に開始されたが、北部州では教育の普及は遅れている。学校制度としては他に教員養成学校、職業・技術学校があり、大学は1948年にロンドン大学と提携したユニバーシティ・カレッジとして創設され、63年に独立した大学となったイバダン大学や、60年創立のナイジェリア大学などが挙げられ（⑦：761-762）、1980年現在で総合大学9、単科大学2を数える。

II. 教育内容・方法

1. 英語の位置

ナイジェリアに英語が初めてもたらされたのは1842年のことで、伝道のために宣教師が伝えたものであった（⑤：149）。イギリスから独立した後も英語はナイジェリアの重要な言語としての地位を保っており、憲法にこそ明示されていないが、実質的な公用語として機能している。政府の公文書は僅かな場合を除いて英語で書かれ、教育の場においても、初等教育の第2学年までは英語を1教科として教えるが、第3学年以上は英語が教授言語となっている。そのほか、新聞、ラジオなどのマスコミ関係でも英語が主流をなし、文学作品も殆ど英語で書かれている。また、部族相互間のコミュニケーションや、国際的コミュニケーションの場でも英語が用いられている（③：35-36）。そして、一般的傾向としては、formalな場面では英語を用い、informalな場面では Pidgin English や部族語を用いているようである。

一方、なぜ英語を学ぶのかということとその動機を探ってみると、読書力を中心とした実際的な必要性や、商業・経済上の必要性の故にとするもの、status symbol としてとするもの、キ

リスト教信者が自ら聖書を読みたいという宗教的理由によるもの、国民としての義務と感じているもの、など幅広いものが見られる(⑮: 155-157)。

2. 教育課程

まず、就学前教育の場合については、教授言語は母語ないしその地域共同体の言語によることを原則とするという政府の勧奨があるにも拘らず、現実には、殆どの就学前教育機関で英語だけが用いられている、調査対象の82%の保育園で英語が使われている、20校のうち16校が英語だけ、3校が英語と母語に拠っている、などの調査結果が出ている(④: 438)。また、保育園の先生の多くが、保育園の有する7つの機能のうち、英語による言語発達が最も重要である、と捉えているとのことである。

初等学校では、上述のごとく、英語は最初1教科として扱われ、後に教授言語として用いられるが、その切り替えの時期は公的には第3学年となっている。ところが実際には、第1学年から教授言語として扱う州もあれば、逆に、第4、第5学年にならないと切り替えのできないところも少なくない。これには、どれくらいの生徒が共通の言語を話すのかという均質性、教師の英語力、校長の姿勢などが関係しており、例えば生徒の殆どがヨルバ語を話す地域ではかなり長くそれを教授言語とする傾向が強い(⑥: 3)。また、初等学校での英語教育の成果があがらないのは、教師の多くが初等教育終了程度で、訓練を受けていない者も少なくないこと、spoken Englishを軽視する傾向にあること、学習環境、設備が充分でないこと、などの原因による(⑭: 82-83)。

さらに、教科としての英語教授時間数も区々で、30分授業の週あたり時間数をいくつかの場合について示すと次のようになる(⑥: 4)。

STATE	Std. I	Std. II	Std. III	Std. IV	Std. V	Std. VI
Lagos	2	5	6	6	7	8
East Central	5	10	8	7	10	10
West	7	8	8	8	8	10
South East	13	12	12	14	14	14
North East	8	8	8	8	10	10

一方、中等教育レベルの英語教育の目標は公的には、生徒に英語を流暢に話す力をつけさせることにあるとされ、英語、フランス語とも国際的・文化的関係という展望の下に教授する、となっている(⑰: 122)。

また、教授時数も州により異なり、さらに言語クラスと文学クラスとに分けられていて、通例、その両方を同じ教師が兼任することはない。40分授業の週あたり時間数を示すと下のごとくである。

STATE	1	2	3	4	5
Lagos State	4 (2)	4 (2)	4 (2)	4 (2)	4 (2)
East Central State	5 (3)	5 (3)	5 (3)	5 (3)	5 (3)
Western State	7 (2)	6 (2)	6 (2)	5 (3)	4 (4)
South Eastern State	5 (3)	5 (3)	4 (3)	4 (3)	4 (3)
Kwara State	6 (5)	6 (5)	6 (5)	7 (6)	7 (6)
Mid-West State	3 (2)	3 (2)	4 (3)	4 (4)	4 (4)

カッコの中が文学クラスの時間数で、学年によって英語の全時間をそれに充てるところもある。そして、文学クラスでは作品の鑑賞よりも少量のテキストについての知識の方が重視されている。さらに、言語クラスと文学クラスを分けているため、前者の授業は退屈なものとなり、教師は後者の方を知的訓練のクラスと捉える傾向にあるという(⑥: 5)。

3. 教科書・教材など

教科書は多くの欠点を有しながらも、取って代わるような良い教材もなく、教師も英語力が十分でないために教科書に頼りきりになる傾向もあって、主要な教材としての機能を果たしている。しかし、地方ではそのような教科書の供給もままならない状態である。教科書の欠点として指摘されているのは、その著者は西アフリカの英語教育上の諸問題や教授法などについての知識が乏しく、その内容も西アフリカの国々が要求するところに即さない国外出版によるものである、等の点である(④: 275)。しかし、英語教育を促進するような教科書も開発されつつあるとのことである。中等学校の代表的な教科書としては Ogundipe and Tregidgo の *Practical English* (⑥: 6)、Montgomery の *Effective English*, Grant, et al. の *Secondary English Project* (⑨: 12) などがあり、初等学校ではアルファベットや数字の諸語、基礎英単語の意味認識から簡単なストーリーの内容把握が中心となり、中等学校用では単語と文型が中心になっているようである(⑨: 122)。

一方、ラジオの英語番組も様々なレベルで放送されているが、受信機の設備がないというのが現状で、地方ほどその傾向が強い。また、レコードやテープなどについても、殆どの学校がそれを利用できない状態にある(④: 275)。

4. 教授法

UNESCO の報告によれば、最初は直接教授法で教え、だんだん学年が進むにつれて文法式教授法が用いられるようになるとのことであるが(⑩: 122)、近年は ESL/EFL 方式ないしバイリンガル方式により、文型練習のほかに絵、演示、劇化、生徒間の対話などを取り入れて、すべてオーラルで行われているようである(⑨: 120-121)。ただし、前述のごとく、中等学校では英語の授業が言語クラスと文学クラスとに分かれており、それを担当する教師の姿勢もあって、必ずしも均斉のとれた形では進められていないようである。

5. 教員養成

正式の訓練を受けた有資格教師が少ないことは既に述べた通りであるが、具体的な数字を示すと、1966年に出された Jacobs Report によれば、7,321人の中等学校教員のうち、約27%にあたる2,000人ほどが有資格教師であるだけである(⑥: 4-5)。その後、事情は改善されつつあるものの、無資格教師の比率は依然として高い状態にある。

英語教師の養成は大学および高等師範学校(Advanced Teacher Training College)でなされているが、後者は連邦政府がアメリカの Aid to International Development, フォード財団、および UNESCO の協力を得てラゴスに創設したもので、そのスタッフは UCLA, オハイオ, ウィスコンシンンの各大学から派遣されて教員養成の任に当たっている。

III. 考 察

ナイジェリアの英語教育は、東アフリカの場合と同様、旧イギリス植民地に見られる一般的傾向を反映しており、今後どのような方向に進むか注目される場所である。東アフリカのスワヒリ語のような強力な lingua franca をもたないこの国において、英語は今後も有力なコミュニケーション手段として存続するであろうことは充分予想しうるところである。しかし、一方では独自のナイジェリア英語が発達することもあり得ることで、実際そのような傾向も指摘されている。例えば、Ubahakwe の報向によると、英語の proficiency のレベルの低下、ナイジェリア英語の発達、英語使用が tool-oriented になる傾向、国際的 comprehensibility の低下、などの現象が見られるという(⑩: 158-161)。この最後の点については、大学生24名の英語を240名の英国人

に聴かせてその intelligibility を調べたところ、92.7%~29.9%という広がりを持ち、平均は64.4%であったという1974年の調査結果を見てもうなずける。

しかし、一方では、The West African Examination Council による英語テストの標準化が進められており、西アフリカの英語教育の水準を高める試みもなされている。また、The Nigerian English Studies Association による研究大会も開かれ、英語の研究とともに英語教育の研究も盛んに行われるようになってきている。連邦政府は、小学校では少なくとも3年終了までは適当な Nigerian languages を用いて授業を行うこと、という教育政策を勧告しているが、現実には英語教育が大きな位置を占めており、今後どのような方向に進み、どのような成果がもたらされるか、期待される場所である。

〔参考文献〕

- ① Adekunle, M. A. (1970) "Towards a Realistic Approach to Problems of English Instruction in West Africa," *ELT*, 24, 3, 269-278.
- ② Afolayan, A. (1966) "Some Problems of English in Western Nigeria," *ELT*, 20, 3, 257-262.
- ③ Bamgboṣe, A. (1971) "The English Language in Nigeria," in Spencer, J. (ed.) (1971: 35-48).
- ④ Dare, G. J. (1981) "Language Programmes in Nigerian Nursery Schools," *ELTJ*, 35, 4, 437-443.
- ⑤ Ekong, P. (1982) "On the Use of an Indigenous Model for Teaching English in Nigeria," *WLE*, 1, 2, 87-92.
- ⑥ ETIC (1982) "English Language Teaching Profile: Nigeria," Mimeo.
- ⑦ 伊藤正孝, 山崎由美子 (1974) 「ナイジェリア 政治・社会」『ブリタニカ国際大百科事典』第14巻, 761-762. (ティビーエス・ブリタニカ).
- ⑧ 西野照太郎 (1972 pr.) 「ナイジェリア」『世界大百科事典』第23巻, 9-11. (平凡社).
- ⑨ 芝田征二 (1979) 「世界の英語教育(1) ナイジェリア——民族性と国民性の観点より——」『語法研究と英語教育』創刊号, 119-122.
- ⑩ Spencer, J. (1971) "West Africa and the English Language," in Spencer, J. (ed.) (1971: 1-34).
- ⑪ _____ (ed.) (1971) *The English Language in West Africa*. (Longman).
- ⑫ Strevens, P. (1961) "The Development of an Oral English Test for West Africa," *ELT*, 15, 1, 17-24.
- ⑬ Thompson, P. D. (1963) "English in the Commonwealth: 6-Nigeria," *ELT*, 17, 4, 152-158.
- ⑭ Tiffen, B. W. (1968) "Language and Education in Commonwealth Africa," in Dakin, J., B. Tiffen, and H. G. Widdowson (1968) *Language in Education: The Problem in Commonwealth Africa and the Indo-Pakistan Sub-continent*, 63-113. (Oxford Univ. Press).
- ⑮ Tomori, S. H. O. (1977) "A Diachronic and Synchronic Study of the Motivation for Learning English in Nigeria," *ELTJ*, 31, 2, 149-158.
- ⑯ Ubahakwe, E. (1980) "The Dilemma in Teaching English in Nigeria as a Language of International Communication," *ELTJ*, 34, 2, 156-163.
- ⑰ UNESCO (1964) *Modern Languages at General Secondary Schools*. (International Bureau of Education and Unesco).
- ⑱ Willmott, M. B. (1979) "Variety Signifiers in Nigerian English," *ELTJ*, 33, 3, 227-233.